



【神の御前で人が警戒すべき罪】

聖書:ルカの福音書 18 章 9-14 節・暗唱聖句:ペテロの手紙第一 5 章 5 節

説教者:鄭南哲牧師

(Rev.Jung namchul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチ信仰の家族のみなさん! 一週間の間も神様の御前でみんなお元気でしたか。

< 神様の御前で罪に敏感だった信仰の先輩たち >

イギリスの有名な作家であり、ケンブリッジ大学の教授だった C.S.ルイスというは今日をこのように診断しました。“求道精神(きゅうどうせいしん)を失った時代”だと。人が真剣に神を、真理を求めようとしない時代、無関心の時代になってしまっているその証拠の一つが、罪に対して真剣に考えようしないということです。自分の犯した罪のために真剣に悩み、心を痛みながら、罪を克服するために必死に戦い、努力しようとする人々は現代の人々の中にはそんなに多くないという指摘でした。そのため、罪から救い出された感激も、罪と誘惑から打ち勝つ喜びも経験していないクリスチャンがあまりにも多いとも指摘しました。

キリスト教の歴史を調べると、神様の御前で敬虔だった人々は神様の御前で信仰を守るために罪に対して敏感だったことがわかります。4世紀ころグレゴリ大祭司(Gregory the Great)を中心に神様の御前で特に警戒すべき七つの罪を聖書から探して指定したそうです。この7つの罪は、「高慢、嫉妬(焼きもち)、憤り、貪欲、貪食(むさぼり食う)、怠惰(たいた、怠けもの)、情欲」でした。キリスト教歴史を見ると、この7つの罪を「7つの致命的な罪(seven deadly sins)」、あるいは7つの重罪(じゅうざい; seven cardinal sins)だと呼ばれました。

なぜ七つの罪だったのでしょうか。いろいろな理由がありますが、大切な理由の一つは一週間単位で毎日人が犯しやすいひとつずつの罪と戦いながらその罪から打ち勝つ生き方となるように努力したそうです。そういうわけで一週間、つまり七日間、七つの罪を警戒しようとしたのです。神様の御前で人間が犯しやすい罪がたった七つだけでしょうか。もちろんもっと多くあるでしょう。しかし少なくとも、中世期の敬虔書物を調べると、神様の御前で敬虔に生きようとした信仰の人々はどれだけ罪に敏感になって罪と戦おうと努力したのか十分わかります。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん!そういうわけで私も今日から連続で神を信じる者らが警戒すべき致命的な罪は何なのかみなさんとともに御言葉をとおして学び、恵みを受けたいと思います。特にこの罪に対する御言葉がただのご自分の知識に終わらないで、ひび罪に敏感になって、罪を警戒し、罪と戦い、罪に打ち勝つ喜びと守られている感謝が回復され、経験する祝福の機会となりますように主イエスキリストの御名によって祈ります。

< 我らの警戒対象 1号 - 高慢 >

今日は一つ目に、高慢について考えたいと思います。高慢はあらゆる罪の根本だと言えます。中世時代の敬虔な神学者だったトマス・アクィナスは“高慢はあらゆる罪の母だ”と強調しました。どんな意味ですか。ほかのすべての罪は高慢から出て来る! そういうわけで他のすべての罪は高慢から出たものであると言えます。つまり、高慢は嫉妬を生み、高慢は憤りを生み、高慢は貪欲を生み出す! そういうわけで高慢はあらゆる罪の根になり、母になるのだとトマス・アクィナスは言ったのです。

< 今日の聖書本文 内容 >

今日みなさんもよくご存知の聖書箇所でありますルカの福音書 18 章 9 節ではパリサイ人と取税人が祈るためにエルサレムの宮に上ったたとえ話が記録されています。イエス様は今日の御言葉をとおしてパリサイ人たちの高慢をさらけ出して下さっています。今日の本文の言っている高慢の特徴は何なのか、高慢はいったいどんな罪でしょうか。

1. 高慢は極端的な自己中心的罪です。

まず、イエス様はだれにこのたとえ話をされたのかに注目してください。

9 節です。「**自分を正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たちに**」と書かれています。このたとえ話の対

象は“自分を義人だと自任し、ほかの人を見下している人たちでした。”その体表的な人物たちが、まさしくイエス様の当時、パリサイ人たちでした。彼らは自分たちだけが義人(いつも正しい)だと確信し、他の人々を見下しながらさげすみましました。

もちろん自分を愛し、尊重し、大切にすること自体が決して間違っていないでしょう。

我らに自分を愛する自愛は必ず必要です！我らの健康な信仰と精神を守るために、むしろ自愛は必須です。

ですから、自分を尊重し自分を愛する事は決して罪ではありません。

しかし、問題は何か。自分だけがいつも間違っていない、いつも正しい！自分だけが義人、つまり、自分のみを愛する事が罪なのです！！

今日の本文に出ているパリサイ人たちは自分はいつも義人だと自任し、確信しているため、他の人々を見下しました！自分をあまりにも大切に重んじたあまり、自分を正当化するために、他人を言葉と行動を非難し、無視しながら、自分より駄目な人かのように見下したパリサイ人たちでした。

イエス様は、それが高慢の罪であると指摘して下さっています。

高慢は一つの自己崇拜だと言えます。誰かが高慢をこのように定義しました。“自分を高めながら楽しめる病気”だと。このように高慢は自分を楽しめる事ができても、他人には苦しみを与える一方です。

15世紀、宗教改革の始まりを開いたイタリアの「サボナロラ」という有名な説教者であり、宗教改革者がいました。

カトリックが強かった当時、ある日の朝、彼がカトリックの教会に来て散歩をしているうちに教会の庭にあるマリア像の前で、ある婦人が参拝し祈っている姿を見えました。その次の日も、雪が降っても、雨がふいてもその婦人はかならず毎朝同じ時間に祈りに来たのです。春がすぎ、夏がすぎ、また秋がすぎ、冬が来ても、その婦人は祈る姿を保ちました。

サボナロラはその信仰の姿に感動して、その教会の神父さんに伝えたら、なぜかその神父は苦笑いながらこう言います。“それがね～そのストーリー知らないのか？以前あのマリア像が作られるために、ある芸術家に依頼をしたのだが、その芸術家がマリア像のモデルを捜していてよくやくみつけたのがあの女だったのです。自分をモデルにされて造られたあのマリア像が完成されてからは、以前は祈ったことがなかったあの女は毎日のようにマリア像のまえに出て来て祈ろうとしたの。”

どんな意味が分かりますか。その女はつまり、ずっと自分自身を崇拝していたのです！信仰の名前で祈る習慣は持っていたのですが、信仰生活をとおして神様を切に求め、探すためではなく、自分の顔の姿で作られたマリア像が嬉しくて、熱心に日々をそのマリア像の前で過ごしたわけでした。

まさに神様を信じているように見えますが、実際に身を隠している“自己崇拜(ego worship)”を指摘した話しです。

これは我らの心にもありえる姿です。旧約聖書中創世記3章5節を見ると、蛇の姿をしたサタンはエデンの園にいる女エバに来て、どんな誘惑で誘ってましたか。「それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになる」と誘いました。その意味は、“あなたはいつも神のように正しくなる。あなたがたの考えと選択は神のように間違っていない。あなたがたは神のように完璧だ。あなたは間違いが一つもない。神様の御心とあなたの心だよ。あなたが絶対に聖書的で、他の人たちこそ非聖書的だよ。!”まるで人が神様のように、自分が絶対者になるかのように誘惑しました。

このように高慢は自己中心から来る罪です。

2. 高慢とはほかの人と自分との間、壁をつくる罪です。

本文でパリサイ人が祈っている姿を聖書はどうやって表わしていますか。**11節**です。

「パリサイ人は立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私がほかの人々のように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。』」

パリサイ人が祈っていた場所は取税人が祈った場所と区別されたところでした。

きっと取税人が祈った場所から離れて祈ったと思います。取税人とは一緒に祈ることすらいやだったのからでした。

そしてパリサイ人の祈りには 2 回も繰り返される単語があります。「**でないこと**」という言葉です。

パリサイ人たちは当時取税人たちをイスラエル同族を裏切り、ローマにへつらう最低な者、イスラエル人を苦しめる人間らしくない者として付き合っはいけないやつらだと思っていました。

このようにイエス様は取税人をさげすんでいるパリサイ人の心のそこにある**優越感**や**高慢の根**を見抜(みぬ)いたのです。

かりに、パリサイ人が取税人を見ながら、“**彼がたとえやってはいけないことをしたのは確かで、我らの民族に傷つけているのも事実だが、それにもかかわらず、あなたも神様の似姿に造られた者だ。あの人の中にも神様の御手がともにあり、神様に愛される、神様の存在であるのだ。**”という考え方をもっていたならば、彼らはどのように取税人に接したと思いますか。あるいは、“**あなたも、わたしもみんな神の御前で罪人であるから同じである**”という事実を認めたら、パリサイ人は取税人に対する姿勢はきっと変わって来たでしょう。

私たちはイエスキリストを信じる者として、自分の中他人と勝手に比べながら、よく他人に対して度をすぎるほど攻撃的で、誰かに対してよく否定的で、批判的な態度を取る事も気をつけなければなりません。その背後に自身の優越感、いつも自身が正しいと思い込み、高慢の根が芽生える可能性を少しも許さないように気をつけなければなりません。

他人の目のちりはよくみえながら、自分の目にあるはりは気がつかないこと！これも高慢という病気のきざしだといえます。このような人たちは、自分が他人を批判する時はいつも健全な批判だと言いますが、他人から批判される時は張り切って否定的な批判だと憤りながら、自分合理化する矛盾(むじゅん)をもっています。

*** 慢な人たちの特徴は壁をつくることです。壁をつくり、人々を分からせます。**

反面、**謙遜な人たちはいつも人々の架け橋の役割をします。**イエス様はまさに神と罪人の中で、架け橋をするために来られたお方であります。私たちが信仰をもっているクリスチャンであり、イエスキリストの弟子であるなら当然橋渡しをする者になるべきではないでしょうか。**高慢は他人と自分の間に断絶の壁を作る罪なのです！**

3. 高慢は神様の前ですら自分をあざむこうとする罪です。

今日の聖書箇所**の11、12節**で高慢なパリサイ人の祈りの中で強調されている単語が一つあります。それは“**私**”という単語です。ギリシャ語の原文聖書では“私”という単語が繰り返し続けて使われています。

「神よ。**私**がほかの人々のように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、**(私)**がこの取税人のようでないことを感謝します。**12私**は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、**(私)**十分の一を献げております。」

これが本当に神様に捧げる祈りでしょうか。祈りではなく、神様の御前で自分を自慢しているように見えませんか。**私という者はどんなにえらい者なのか。自分がどんなに頑張っているのか**を神様に宣伝しているように見えています。

祈る時の主語はだれになるべきでしょうか。(私がではなく、**神様が！**である)

「神様、私をあわれんでくださってゆるしてください。神様あなたのみこころに従って生きるように私をたすけてください。」このようにいつも祈る時の主語は、私がではなく、神様にならなければなりません。ところが、パリサイ人の祈りの主語は初めから最後まで「**私、自分自身**」でした。パリサイ人の祈りは、神様のためではなく、神に祈りの形と行為をしても、ただ自分をなぐさめる行為にしかありませんでした。

私が出会った人々の中で敬虔に生きようとしている人々を見ると、彼らには**一つの特徴**があります。それは**ふかく祈る**ということです。切なる祈りは自分と人を変えます。ある人はたくさん祈っていると言っても、何の変化がありません。それは間違った祈りをしているからです。

神様の御前で裸(はだか)のようにありのまま自分の全てを主の前にさらけ出し祈る人々、神様の哀れみと助けを切に

求めながら祈る人々はかならず、変えられます。

しかし、高慢はこんな変化を拒否します。神様の御前でさえも、本当の自分を隠します。高慢は自分の罪を神様の御前で認めないようにさせます。ですから、高慢は自分自身のみならず人や神様をあざむく罪です。

< 高慢という罪の結果 >

すると、このような高慢の罪を放置(ほうち)した時の結果は何でしょうか。

14 節をどなたが読んでくださいますか。「あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」

当然高慢という罪はどんな祈りにも神に答えられません。なぜなら、神様から助けられないからです。もっと正確にいわせると高慢な人は救われません。高慢な人は十字架のイエスキリストの義に頼るのではなく、自分自身が正しいと思う自己義に頼っているからです。結局、高慢の恐ろしさは、相変わらず、自分こそ、神のように自分の王座にずっとついていきます！

私たちが救われるためには自分の罪を見抜かなければなりません。

神様の御前で罪のあるみじめな本当の自分の姿をみとめなければなりません！

イエス様はマタイの福音書5章3節で「**心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。**」と言われました。神様の御国が自分のものになるための一番の姿勢は、まず自身の心が貧しくなければならないということです。「神様でなければ、私は正しく判断し、正しく生きていられません。自分の足りなさや弱さや罪深い人であることを認めます。神様は私の全ての罪をご存知です！私のすべて正しく見直し、変えるのは主のみであると信じます。あなたこそ、私のすべての罪から赦し、救い出すことの出来るお方であるから、今日もあなたの実にたよります。」

罪人である私のために死んで復活されたイエスキリストを受け入れ、頼る時こそ、神様はその人を義と認めてくださると聖書は言っています。

ですから、みなさん！これがまさに福音の逆説です！人が罪人である事を認めるのに、その瞬間、義とされるのだと言われている。反対に神様の御前で、堂々と自分を表わそうとする人は神様の御前に立つ事はできません。そういうわけですから高慢な人は救われないのです。

ある人が福音を聞いて、イエスを信じ、救われたとします。しかし信じたキリスト者たちにも高慢という誘惑はつねにやってきます。クリスチャンが高慢になった時、彼に起こる最悪の状態は神様からの祝福、神様からの深い恵みをもう経験できなくなることです。なぜなら、高慢な人は神様の助けを必要としない人であって、それなら神様の方から助けられる余地はない人になってしまうのです。

黙示録2～3章には、小アジアの七つの教会が紹介されていますが、その中でラオディキア教会の人々が高慢だったようです。彼らは神様の御前でこう言います。「**自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっていない(黙示録 3:17)**」

彼らは実際、自分は富んでいた者たちで、全て豊かだったと思い込んでいますが、イエス様は彼らにどのように語っていますか。黙示録 3 章 17 節後半では、「**実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かってない**」神様の御目で彼らは決して富んだ者たちではありませんでした。むしろみじめで、貧しい者たちだったのです。

私たちは神の御前で情けない自分を悟り、自分の恥ずかしさを悟る時、ようやく神様の憐れみと助けを求めるようになります。しかし、高慢な人たちは神様から助けられないこと、これがまさに高慢による最後の悲劇なのです。

本文**14節**では「自分を高くする者は低くされる」と言っています。神様は高慢な人を忌み嫌われます！

それどころか**敵対**します。「神は高ぶる者に敵対し、へりくだった者に恵みを与えられる」のです(第一ペテロ5:5)」と

聖書に書かれています。

みなさん！**高慢はサタンの本質**です。本来、サタンは神様を賛美する天使長でした。しかし彼は神様と等しくなろうとしたため神様に呪われて、墮落した天使、悪魔になったのです。サタンは絶えず神様の敵対する者です。その後も彼は**悔い改める事を拒み続けます**。自分の生きたプライドのため悔い改める事を拒み続けているのがサタンの本質であり、策略なのです。

< 高慢という罪を打ち勝つ方法（祈る取税人の姿と子どもの姿を通して） >

するとどうやってこの高慢という罪を克服する事ができるのでしょうか。答えは一つです。

1. 私たちも取税人のような姿勢に立たなければなりません。

取税人の祈る姿と姿勢を見習わなければなりません。取税人はどうやって祈りましたか。

本文**13節**を読んで見ましょう。「**取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神様。罪人の私をあわれんでください。』**

彼は神様の助けを切実に必要とし、求めています。謙遜な人なら、取税人のようにたえず神様の憐れみと助けを求め、受け入れます！そして謙遜な人ならほかの人の助けも受け入れる人です！

ある本で読んだ内容ですが、**謙遜な人の片手は神様を握り、もう一つの手は隣人の手をにぎる人、そして人生の道をあたたかく歩んでいく人！** どんなに美しい姿でしょうか。しかし、**高慢な人の片手は神様の御手を拒み、もう一つの手は隣人の手を振り切る孤独な道を歩む人**です。

神様の御前でおそれおおく“**神様。罪人の私をあわれんでください。**”と胸をたたきながら、切に祈っていた取税人の謙遜な祈りを私たちも見習おうとしませんか。

2. 謙遜で高慢を打ち勝つ

最後に私たちがどうやって、謙遜な者として祈ることが出来るでしょうか。

パリサイ人と取税人の祈りに対する話は **14 節**で終わっていますが、次の **15 節**以下の内容をも注意深く読んでみる必要があります。**15~16節**をどなたが読んでくださいますか。イエス様は実際の謙遜者はだれであるかを教えてくださいました。一言で言うと謙遜な人は子供のような人だということです！

子供のどんな特徴が謙遜な人の姿を体表しているのでしょうか。

私は子供たちの**単純であり、正直であり、絶対依存性**を持っています！

お腹がすいたらすいたと言うし、いたいなら痛いと言いきながらねだります。とっても正直です！そして助けてといえます。たえず親の存在に絶対頼りたがります。今日の私たちの信仰もこのように子供のようでなければならないと思います。単純になりましょう。

神様は自分の姿を自分よりもよくご存知です。愛するみなさん！ありのままの姿で神様に出て行きましょう。

神様は私たちを受け入れてくださると信じます。イエス様のあの十字架での血潮によって私たちの罪を洗いよめてくださったその確信をもって主にすがりましょう。そして涙の感謝と感激の中で“主よ、感謝します。”と告白しながら、また新たに雄々しく立ち上がって、大胆に進み行きますように主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン！

< 祈り >

“神様、私は神様の御前に一人では到底立つ事の出来ない罪人です。神様からの呪いと裁きからのがれることができません。それにもかかわらず、私の身代わりにイエス様が血を流してくださいました。今私にイエスキリストの血があります。このイエスキリストの十字架の血を見て、私を赦してください、私の祈りを受け入れてください。私は神様の恵みと助けなしには生きる事ができません。今日も私をあわれんでください。感謝します。主イエスキリストの御名によって祈ります。アーメン！”